特集

無形文化財ことはじめ

―無形を伝える技（ワザ）と人（ヒト）

第三号 みずのを

Ⅰ 特集　無形文化財ことはじめ―無形を伝える技（わざ）と人（ひと）

無形文化財

04　昨今の日本の文化財政策の背景　無形の文化財と無形遺産、日本遺産　／井上敏
08　無形文化財体系図
10　重要無形文化財分布図

無形を伝える人

12　工芸　／久留米絣制作者　松枝小夜子・松枝崇弘
17　芸能　／能楽師和泉流狂言方・表具一級技能士　野口隆行

寄稿

20　民俗芸能を通して考える無形文化財の研究について　／長澤昌幸
23　組踊　／茂木仁史

無形を支える技術

26　面打　／新井達也
31　無形文化財を支える文化財保存技術 ―「わざ」と「モノ」の層で支える　／前原恵美
34　異分野との連携で、伝統芸能の道具保全　／田村民子

無形民俗文化財

38　身近にある無形民俗文化財　／松田佳代

寄稿

42　祭りの伝統は創造され、そして歴史となる　／岸川雅範
45　有形民俗文化財から無形の情報を導く方法と課題　／石野律子

Ⅱ 専門家インタビュー

48　株式会社明古堂　／明珍素也
50　東京藝術大学大学院美術研究科保存科学研究室　／貴田啓子
52　合同会社伝世舎　／三浦功美子

Ⅲ 専門家のお仕事

56　陶磁器の補彩について　／北野珠子
62　文化財の殺虫・殺菌処理について　／小峰幸夫
64　江戸と上方における錦絵の色材の差と出版統制の影響　／大和あすか

Ⅳ 家庭で行う保存と保管

68　額を扱う・額の修復　／髙橋志歩

Ⅴ 寄稿

72　食と器　日本の磁器・伊万里焼　／森由美
76　伝えるということについて
　「私」から離れて「なってみる」―「わからない」を突きつける工夫　／川口陽徳
84　エンタメと文化財　エンターテイメントと文化財の交点とは？　／濱田織人

Ⅵ コラム

88　世界の手仕事 ―「幼い難民を考える会（CYR）」による カンボジア伝統織物の復活　／関口晴美
94　旅で出会った文化財 ― 湖と空の祝祭 ミャンマー　／ M. Y.
98　民俗学一夕一話 ―「おみくじ」のこと　／松田佳代
100　エッセイ 人とモノの幸せな関係 ― 八つ当たり　／八木三香

Ⅶ 情報コーナー

102　文化財に関する書籍
　寄稿　田中直子著『文化財の誕生　寺宝の整理と継承の歴史的変遷』を評価し、推す　／有賀祥隆
108　修復の道具と材料を見に行こう　／小林刷毛製造所　得應軒　金開堂

重要無形文化財分布図

重要無形文化財／重要無形民俗文化財の地域分布

文化はその土地固有の気候・風土・植生などによって特徴づけられて育ちますが、同時に周辺地域に影響を及ぼし、及ぼされながら変容していきます。地図に落としてみると、地域ごとの特徴が見えてくるかもしれません。

無形文化財は、そこに人がいる限り全国に遍く存在します。そこでこの図では、重要文化財に指定されたものに絞って可視化してみました。

重要無形文化財は保持団体、保存会等で所在地が分かるものを表記し、個人認定（いわゆる人間国宝）は記載していません。一方、重要無形民俗文化財は夥（おびただ）しい数に上りますので、文化庁により分類された分野により分布図を作ってみました。これらの中で、世界遺産に登録されているものには☆をつけています。

あなたの地域のあの行事がもしかしたら指定を受けている……と、いったこともあるかもしれません。是非文化庁等のHPをのぞいてみてください。

重要無形文化財（団体指定・総合認定※）分布図

※総合認定については、保存会の住所が特定できたもののみ記載しています。

【各個認定】＝人間国宝

重要無形文化財に指定される芸能または工芸技術を高度に体現・体得している者を認定。

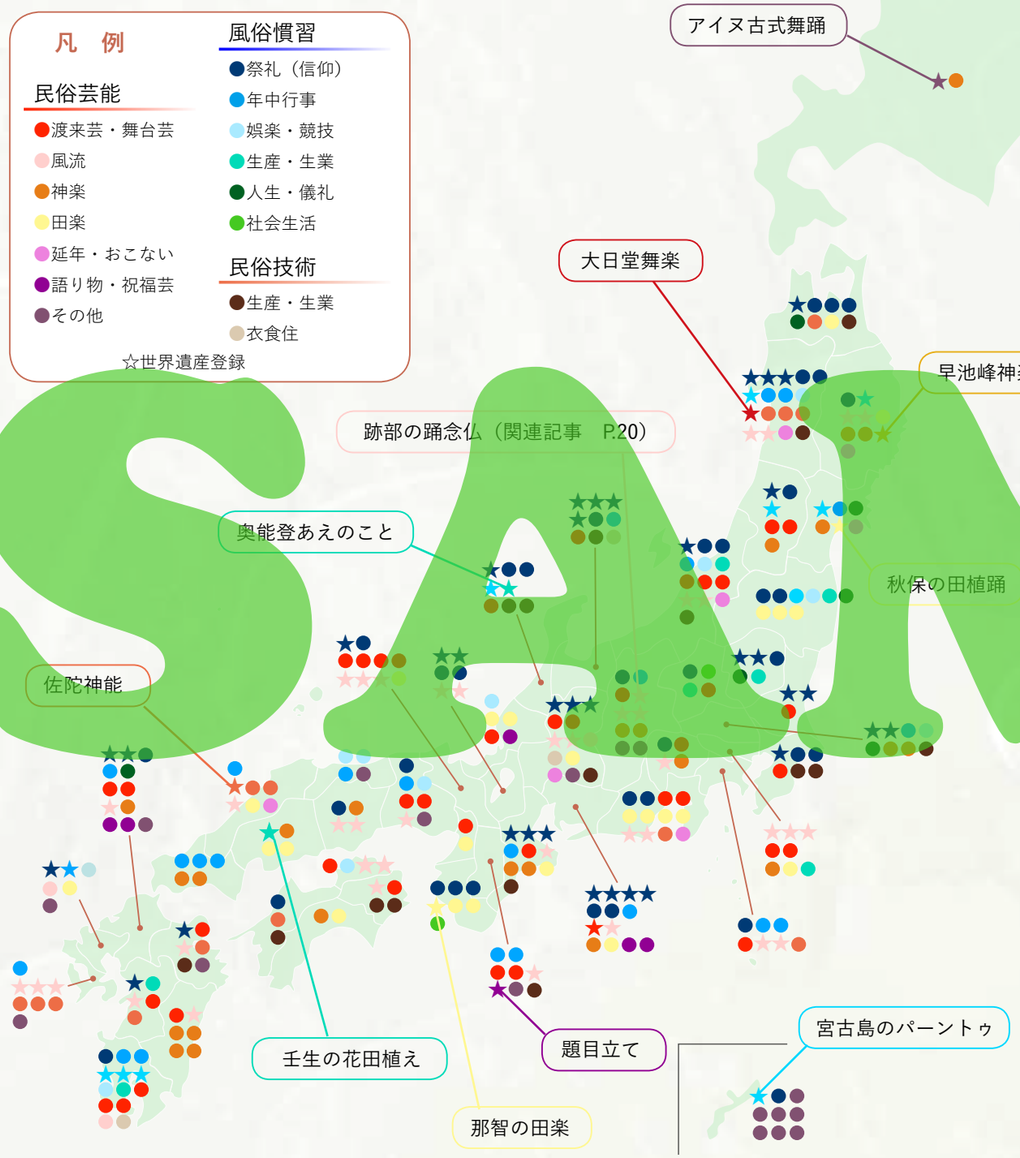
【総合認定】

重要無形文化財に指定される芸能を二人以上の者が一体となって体現している場合に、これらの者が構成している団体の構成員を認定。

【保持団体認定】

重要無形文化財に指定される工芸技術の性格上個人的特色が薄く、かつ、そのわざを保持する者が多数いる場合には、これらの者が主たる構成員となっている団体を認定。

重要無形民俗文化財　分布図



2026 年 3 月 31 日閲覧　参照 URL

文化遺産オンライン
https://online.bunka.go.jp/

重要無形民俗文化財から世界遺産に登録されているものとしては、上記以外に「山鉾・屋台行事」として 33 件、「風流踊」として 41 件が登録されている。

SAMPLE

特集　無形文化財

身近にある無形民俗文化財

松田 佳代
NPOJCPスタッフ
フリーランス学芸員

民俗文化財は生活に根差したものゆえに「有形」と「無形」を明確に切り分けるのも難しいのですが、無形民俗文化財が技術や儀礼といった人の動きそのものであるのに対して、その際に使われる道具や場が有形民俗文化財であり、有形民俗文化財を保存することによって無形民俗文化財の存在（現存しないものの記憶も含めて）を保存するという関係になるかと思います。

逆に言えば、いつ・どこで・誰が・どのように・何のために使っていたかという無形の部分の情報を失ったモノは資料としての価値を活かしきれていない状態になります。そこで重要になってくるのが民俗調査と記録です。日常生活と密接につながっている民俗文化財は生活様式が変われば一緒に変わっていくのが当然の流れであり、一回限りの記録ではなく変化の推移を追って記録し続けることも大切です。民俗調査については別稿にゆだねることとしまして、ここでは暮らしの中に生き続けている民俗文化財について考えたいと思います。

生活のほぼすべてにわたって蓄積されてきた技術や知識や習慣が民俗文化であり、その主体は家族であったり集落であったり、集落を超えた広範囲の集団（信仰的な連帯や生業によるつながりなど）であったりとさまざまです。国や地方公共団体の指定を受けている民俗文化財は顕著な特徴があるものが選ばれていますが、例えば年末に大掃除をして大晦日に蕎麦を食べて元日には初詣に行く人は結構多いのではないでしょうか。この年越しの一連の行事は江戸時代から続いている日本人の行動様式で、立派な民俗文化と言えます。お盆も最近は様相が変わりつつあるとはいっても、SNSなどを見ているとキュウリとナスで作る精霊迎えの牛馬が現代的にアレンジされて自動車や電車の模型を飾った写真が投稿されていたりする、それでもやはり亡くなった人をお迎えして、お盆の期間を一緒に過ごして送り出すという基本の部分は継承されているのです。あるいは日常的に米と味噌汁を食べていることでさえも民俗文化であり、私たち一人一人が担い手でもあります。

『江戸歳事記 巻四』（東都歳事記）齋藤月岑編 【国立国会図書館デジタルコレクションより】
▶年末の大掃除にあたる煤掃きの図。大晦日ではないがこの日も蕎麦を振る舞う風習があり、図の中央左寄りに蕎麦を食べる人々が描かれている。

浮世絵に発見！年中行事
知ってる？やってる？

「東京名所四十八景　浅草酉の市」昇斎一景
【東京都立図書館 TOKYO アーカイブより】
▶11月に行われる開運招福と商売繁盛を願う祭り。七福神や鶴亀、小判など縁起物を飾りつけた熊手を求める人々で現在も賑わう。

「名所江戸百景　市中繁栄七夕祭」歌川広重
【国立国会図書館デジタルコレクションより】
▶7月7日に各家が短冊や瓢箪をつけた笹竹を掲げている様子。今も仙台や平塚では毎年有名な七夕のお祭りが行われている。

「江戸自慢三十六興　洲さき汐干かり」
歌川豊国、歌川広重
【国立国会図書館デジタルコレクションより】
▶描かれているのは東京都江東区の洲崎。江戸時代は多くの庶民が訪れたが、現在は埋立地になり、残念だがあさりはとれない。

試みに歌川広重の「年中行事双六」で江戸の年中行事を図解してみました（次頁）。双六には月日や行事の解説は書かれていないので斎藤月岑編纂の『東都歳事記』（天保9年刊）と鈴木棠三著『日本年中行事辞典』から合致する（一部推定ですが）内容を補完しています。もちろんこの双六に出てこない行事もたくさんありますが全ての年中行事を網羅しようとすると一冊使っても終わりそうにないのでご容赦ください。

「うちでもやっている！」というものから「聞いたこともない」というものまであると思います。江戸時代というと遠い昔のようですが、この表にある多くは二十～三十年ほど前までは民俗調査で聞き書きできた行事であり、当時の話者の方々にとっては話すほど特殊なことでもなく「どんな行事がありますか？」と聞いても「普通だよ」「そんな普通のこと聞いてどうするの」と返ってくるような当たり前の生活の一部でした。「年中行事双六」や『東都歳事記』が出版された時代から200年近く経っていますが、その間に明治維新で政府が変わり戦争があり災害があり、さまざまな事象を乗り越えて残っているのは生活と一体化していたからこそです。こんな当たり前のことを調査したり記録したりする必要ないでしょ、と思っているうちに生活が変わって従来の「普通」が普通ではなくなれば急速に消滅して存在したことすら忘れられていきます。

ここで文化財保護法の「生活の推移の理解のため欠くことのできないもの」という民俗文化財の定義が活かされてくるわけで、ただの懐古趣味ではなく、文献や形に残りにくい普通の人々の暮らしの歴史をどのように残していくか、その方法の一つとして無形民俗文化財の保存と記録が図られています。

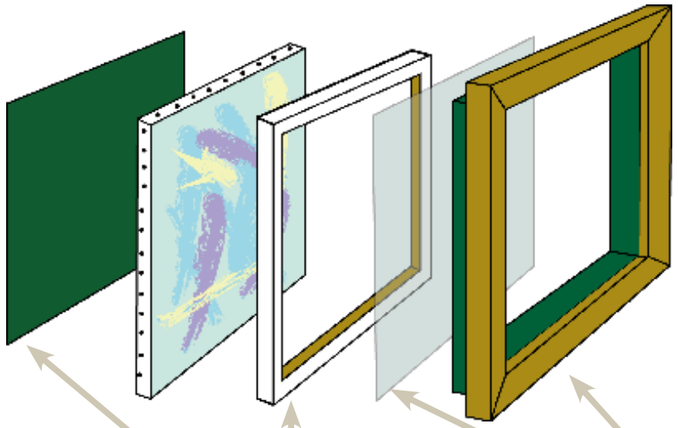
「年中行事双六」歌川広重
【東京都立図書館 TOKYO アーカイブより】
◀次頁に図解

家庭で行う保存と保管　額を扱う

創刊号では掛軸の取り扱いについて取りあげました。第三号では油彩画や版画などの紙作品を入れる洋額の取り扱い方について紹介します。額縁は作品を飾るものであり、また環境を整えることで小さな収蔵庫にもなります。

文責：髙橋志歩　NPOJCPスタッフ　油彩画修復家

額の構造



名称と役割

フレーム
額の見栄えと構造の支柱を担う。

グレージング
粉塵や衝撃などからの保護を担う。
★グレージングの種類
アクリルや硝子などの素材があります。映り込みが少ない低反射や、作品の退色や黄変を抑制させるUVカットなどの機能で選ぶことが可能です。

ライナー／入れ子
グレージングと作品の接触を防ぐ。

裏板
裏面からの粉塵や衝撃の防御と、温湿度の変化を緩和。
既存の額に多用される合板だと、ヤニが作品に移る可能性があるので、間紙を挟むか、中性のボードに差替えると保存性が高まります。

安全に長く飾るためのチェック

- ●結露していないか？　●ほこりが積ってないか？
- ●グレージングが汚れていないか？

クリーニングしましょう → 1

- ●裏板に反りが出ていないか？
- ●新聞紙などの酸性紙が入っていないか？

作品の劣化につながる前に交換しましょう → 3

- ●裏板や作品を止める金具がゆるくなっていないか？
- ●紐類が切れてないか？　●金具が錆びていないか？

作品が外れてしまう前になおしましょう → 3

- ●作品と額のサイズがあっているか？

作品が外れてしまう前になおしましょう → 2

次のような損傷はご相談ください

- ●フレームの割れ・欠損
- ●入れ子のがたつき
- ●結露によるカビの発生
- ●塗装の剥離

P70　番外編　額の修復

1 額をクリーニングする

全体の埃を刷毛で軽くはらう。結露している場合は一度作品を取り出して乾かします。

グレージングの埃はブロワーで吹き飛ばし、汚れはクロス等で拭く。精製水で水ぶきしても綺麗になります。

使用道具

- ●刷毛（山羊等の柔らかいのがお勧め）
- ●静電気除去ブラシ（最後に撫ぜると埃防止に）
- ●ブロワー（カメラの用具として売っています）
- ●精製水（市販品のクリーナーはNG）
- ●クロス（眼鏡ふきなどのマイクロファイバー）

2 サイズ調整する

もし額と作品の間に隙間があったら、紙などを挟み動かないようにします。新聞紙はNG! できれば中性紙。

★マット装する

作品にヒンジをつける

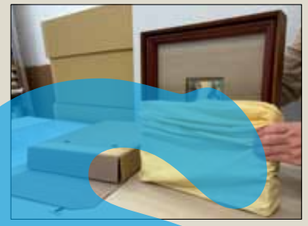
紙作品の場合は、マット装※すると安全に額装できます。作品に直接触れるため、購入する際は中性紙マットで対応が可能かお店の人に確認しましょう。またマットへの固定の仕方も重要で、紙の厚みや種類によって、ヒンジ付けや三角コーナーなどを検討します。

3 金具・裏板を交換する

何度も開け閉めすると、ネジ穴が大きくなりゆるくなります。その時は長めのネジに交換するか、位置をずらして留め直します。

裏板は、中性紙のボードが軽くて安全です。ポリカーボネートだと強度があり、透明ならば作品裏面の様子を確認することができます。

4 額をしまう



「①額をクリーニングする」をした後、後ろの留め金具が閉まっていることを確認してから、黄袋に入れて、箱に入れる。その際、画面がどちら側か印をつけておくと取り扱いの際に安全です。

既製品の額を改良するもよし、額装屋さんによっては保存仕様での作製も可能な場合がありますので、聞いてみると良いでしょう！
また額の保存性を高めても、温湿度の高い場所、直射日光の当たる場所での長期の展示は避けるようにしましょう。

※マット装
絵画や写真と額縁の間に「マット」と呼ばれる厚紙（台紙）を挟み込む額装技法。作品の周囲に余白を作り、見栄えを引き立てるほか、表面のガラスと作品が直接触れるのを防ぎ、保護する役割も担う。

Series

食と器

第三回 日本の磁器・伊万里焼

伊万里焼とは江戸時代に日本で初めて焼かれた磁器。白く艶やかで、青い染付でさまざまな文様が描かれた皿や猪口が、骨董好きだけでなく食器にこだわる人々の間でも愛好されている。伊万里に盛り付ければ料理の格が上がる、伊万里は食卓を彩る素敵な食器の代表！と言う人もあるが、果たしてそうだろうか。

伊万里焼の歴史を辿りながら、食のシーンでの活躍の様子を探ってみよう。

1

日本の磁器・伊万里焼の誕生

白く硬く焼き締められ透明の釉薬がかかった磁器は、土器から始まるやきものの技術進化の最終形だが、中国ではすでに6世紀から白い磁器・白磁が焼かれている。その白磁に青い文様が描かれるようになったのが14世紀の元時代。中国では青花、日本では染付と呼ぶ白と青の鮮やかなコントラストの器は、その後の磁器製品の主役になった。西のイスラム教圏で元の青花は大人気で、優れた伝世品が数多く存在する。中世の日本にも元青花はもたらされていたが、日本は大変な青磁好き（中世末には黒釉好き）だったので、出土や伝世の数は青磁に比べて圧倒的に少ない。16世紀後期以降、大航海時代の余波で中国から白磁、青花、五彩（色絵）の磁器が大量にもたらされるようになった。そしてこの頃、日本でも彩りと文様のある新しい陶器、美濃焼や唐津焼が始まったのである。

PROFILE

陶磁研究家　森（もり）　由美（ゆみ）

東京藝術大学大学院美術研究科修了（保存科学専攻）。
戸栗美術館（東京・渋谷）で学芸員として東洋陶磁の展示企画に携わり、日本陶磁協会で月刊誌『陶説』を９年間編集。現在、陶磁器や伝統文化に関する執筆、講演などの活動を行う。戸栗美術館学芸顧問、女子美術大学非常勤講師。著書『古伊万里』（角川ソフィア文庫）ほか。

九州・肥前国で17世紀初頭に始まった唐津焼は、磁器ではなく陶器なのだが、朝鮮半島の製陶技術を導入した連房式登り窯で焼かれた。この新式の窯で陶器・唐津焼とともに磁器・伊万里焼の焼成が試みられ、有田でこれに成功したのが１６１０年代のことである。新しい陶器・唐津焼は、自分の窯から誕生した磁器に「新しい器」の座を奪われることになり、急速に衰退。肥前国は磁器生産に力を注ぐことになり、その伝統は現在も、佐賀県の有田焼、長崎県の波佐見焼、みかわち焼に続いている。

初期伊万里

有田を中心とした肥前各地で焼かれた磁器は、伊万里津から船で運び出されたので「伊万里焼」と呼ばれた。この伊万里焼、日本最初の磁器ということで大評判だったかと言うと、それがそう簡単でもなかったと思われる。17世紀初頭のその頃、中国製の優れた染付や色絵の磁器製品が日本にもたらされていた。初期伊万里と呼ばれる17世紀前期の伊万里焼は、淡い染付、歪んだ形など、技術の未熟さが見て取れる（写真１）。それは現代の骨董好きからすると魅力的なものだが、当時の人々はどう思ったか。中国製と勝負できるものではなかっただろう。

その初期伊万里、食のシーンの活躍はあっただろうか。京都・鹿苑寺住職の鳳林承章（ほうりんしょうしょう）が綴った日記『隔蓂記（かくめいき）』では１６３９年に「今利（伊万里）焼」の名が登場する。これ以降30年ほどの間に「伊万里」が贈答品などに使われた様子が記されていて、徐々に京都の文化人の間で広がっていった様子がわかる。これらは香合や茶器など小振りの器であったようだ。一方、初期伊万里の優品には40センチを超える大皿がある（写真２）。17世紀には中国製では龍泉窯（りゅうせんよう）の青磁、漳州窯（しょうしゅうよう）の染付や赤絵などの大皿の人気が高かったと言われる。絵画資料でそれらが飾られたり使われたりする様子が見られるのと、伝世の名品の数々からの推測である。初期伊万里の大皿も、ここに加わるために気合いを入れて作られたのではないだろうか。

2

輸出事業の始まり

伊万里焼は、豊臣秀吉の朝鮮出兵をきっかけに渡来した朝鮮の陶工によって始まり、作られていた。目指すのは中国磁器、製陶技術は朝鮮風というのが初期伊万里である。それが17世紀の半ばに変化する。明末清初の王朝交替で混乱する中国から人と技術がもたらされ、見た目だけでなく技術も中国風の磁器製品を作るようになった。もっとも大きな変化は色絵の誕生。白地に青の染付は透明の釉薬の下に描かれ高温で焼成されるものだが、赤、緑、黄色の絵具は焼き上げたものに絵付けして、もう一度、今度は低温で焼くことで得られる。伊万里色絵の手本になった中国磁器は、さまざまなタイプが当時の日本にもたらされていたので、これらをそれぞれ真似た伊万里色絵は、大変バリエーションのあるものになった。濃厚な色彩のもの、軽やかに絵画的文様を描くもの、暗色、暖色さまざまで、この時代の伊万里色絵は、取り留めないほど賑やかだ（写真３）。

3

1.「染付山水文皿」 ColBase より
伊万里 17 世紀前半　九州国立博物館
2.「染付山水図大鉢」 ColBase より
伊万里 17 世紀　東京国立博物館
3.「色絵蝶牡丹文大皿」 ColBase より
伊万里 17 世紀　東京国立博物館